

島根大学

# 社会福祉論集

第7号

福祉社会コース開設20周年記念号

---

《巻頭言》

山崎 亮

《福祉社会コース開設20周年記念企画》

○基調講演

“公民館活動”という名の地域福祉ガバナンス

—私がスウェーデンと松江で学んだこと—

斉藤 弥生 1

○シンポジウム

地域で支える・地域を支える

—参加と協働を推進する社会福祉士の実践—

加川 充浩・櫛山 季実子・井上 友見・三上 貴大・

杉崎 千洋・斉藤 弥生 25

《論文》

地域におけるALS患者とその療養環境に関する実態把握の現状

諸岡 了介 57

《講演録》

脳死の語られ方

—一宗教学者から見た脳死・臓器移植問題—

山崎 亮 69

---

島根大学 人間科学部 福祉社会教室

2020年3月

## 巻頭言——福祉社会コース開設 20 周年記念号

本号、『島根大学社会福祉論集』第7号は、福祉社会コース開設 20 周年記念号であると同時に、発行主体が島根大学法文学部福祉社会教室から人間科学部福祉社会教室に移行した初めての論集となる。この間の経緯を手短かに記しておきたい。

1997 年、島根大学教育学部では、少子化の進展に起因する教員採用数減少を背景とした「ゼロ免課程」拡充の要請から、中四国地方の国立大学初となる社会福祉士養成コースの開設が構想された。2 年に及ぶ準備期間を経て、1999 年 4 月、本コースは、生活環境福祉課程福祉社会コースとして出発する。ところが完成年度を迎える間もなく、2002 年には一転して、文科省主導の教員養成学部統合の要請のもと、「ゼロ免課程」廃止へと方向転換した教育学部を追われる形になってしまった。この結果、教育学部執行部と法文学部の双方に対する綱渡りのような両面作戦を余儀なくされたが、最終的には当時の吉川通彦学長の英断により、2003 年 3 月末、ちょうど学部改組の渦中にあった法文学部への移設が、ぎりぎりのタイミングで決定した。こうして本コースは、2004 年 4 月から法文学部社会文化学科に移設される。10 年後の 2014 年度末には、財界を起点とする文系バッシングの余波で、島根大学新執行部主導の文系新学部構想がにわかには浮上し、本コースはその議論に巻き込まれる形となった。教育学部と法文学部から 40 名ずつの学生定員を譲り受け、文科省との折衝のなかで最終的に、心理学／福祉社会／身体活動・健康科学の 3 コースからなる人間科学部が 2017 年 4 月に誕生し、本コースは法文学部から新学部に移行する。今年度はその 3 年目に当たる。

このように福祉社会コースの 20 年に及ぶ軌跡は波乱に満ちた道程であり、同じ一つのコースが、同じ国立大学のなかで三つの学部を渡り歩いたケースは、本学以外、寡聞にして知らない。いずれの変化も結局のところは、国の施策の変節という外在的要因に帰着するわけで、本コースはまさに、そのときどきの政治的・社会的状況に翻弄されがちな、福祉領域の他律的性格を象徴する経過を辿ってきたと言ってよいかもしれない。しかしながら見方を変えればその経過は、福祉社会コース自体が学部の垣根を越えて自律的に成長してきた過程ととらえることもできる。教育学部での発足当初、福祉プロパーの教員枠は 2 名のみで、定員 20 名の学生教育を維持するために、多くの非常勤講師と専門外の教員の力を借りねばならなかった。法文学部への移設時には教員枠は 5 名に拡大されて厚労省指定科目の大半を自前で賄うことができるようになり、さらに人間科学部への移行に際しては 9 名の教員体制となって、福祉に係る教育内容が格段に充実したことはもちろん、精神保健福祉士の受験資格も提供できるようになった。この 20 年間で本コースの卒業生は優に 200 名を超え、初期の卒業生はすでに中堅のソーシャルワーカーとして、山陰地方を中心に、各地の福祉現場で活躍している。

一方で福祉社会コースでは、発足当初からその研究活動の核として機関誌を発行してきた。教育学部時代には、福祉にまつわる多様な問題を学際的にとらえ直すという方針のもと、『福祉文化』が 2001 年に創刊され、2006 年 12 月、5 号を以て一応の終刊を見た。法文学部移設後の 2007 年からは、社会福祉学的視点をより強化した後継誌として『島根大学社会福祉論集』がほぼ隔年で刊行されてきたのだが、本 7 号からは人間科学部福祉社会教室がその新たな発行主体となるわけである。

以上のような福祉社会コースの開設 20 周年を記念する企画として、2019 年 2 月 16 日に、「新たな福祉社会の構築——地域づくりの視点から」と題する第 4 回人間科学研究フォーラム（島根大学人間科学部主催）が、島根大学（松江キャンパス）大学ホールにて開催された。基調講演には大阪大学大学院人間科学研究科の斉藤弥生教授をお迎えし、これを承けたシンポジウムでは、本コース出身の 3 名の卒業生が社会福祉士としてのそれぞれの実践を報告した。本号の前半部は、このフォーラムの記録である。当日は、本コースの事実上の生みの親である木村東吉島根大学名誉教授をはじめ、多くの卒業生、地域の福祉関係者等、130 名を超える参加者が列席する盛況で、フォーラム終了後に開かれた懇親会も相俟って、まさに福祉社会コース 20 年の歩みの結節点たるにふさわしい、充実した催しとなった。ほぼ 1 年前から企画と準備に当たられた実行委員の方々に改めて御礼申上げるとともに、この 20 年間、陰に陽に本コースの運営と発展を支えていただいた多くの方々にも感謝の意を表したい。

最後になるが、本コース開設時の初代福祉社会教室主任としてご尽力いただいた福田景道先生が、今年度を以て定年を迎えられ、島根大学教育学部を退職される。コースが教育学部を離れた後も、文化共生論の授業を引き続き担当してくださるなど、さまざまな形でコースの運営を支援していただいた。この場を借りて御礼を申し上げ、あわせて先生の今後いっそうの御活躍と御壮健を祈念したい。

2020 年 2 月

## 編集後記

- 島根大学福祉社会コース開設以降、今日まで、山陰地域の福祉関係者の皆さまには、実習や演習をはじめとしたコース運営に多大なご協力をしていただいています。この場をお借りして、深くお礼申し上げます。開設10年前後から、現場の実習指導者、研究会報告者などのなかに、卒業生を見かけることが多くなってきました。そのためもあり、卒業生の仕事の一端を知る機会も増えました。コースは地域のなかである程度の位置を占めるようになったこと、なによりも一人ひとりが苦勞しながらも、利用者のニーズから出発する仕事をしていることを実感しています。さしあたり30周年を見据え、この状況の維持・発展のために学部やコースはどうあればよいのかを考える機会を、この論集が提供できれば良いと考えます。引き続き、多くの皆様のご協力をお願いいたします。
- 今回初めて編集に関わらせていただきました。いろいろと私の段取りが悪く、執筆者の皆様、フォーラム登壇者の皆様にはご無理を申し上げてしまいました。ご協力いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。また、社会福祉論集は本号より電子媒体での発行となり、今までと異なる形で皆様のお手元にお届けすることになりますが、今後とも変わらず、皆さまと意見・論考を交換できる場になればと思います。
- 福祉社会教室では、教員、学生などで組織する山陰社会福祉研究会を開催しています。2018年度の研究会は以下のとおりでした。
- 第11回 山陰社会福祉研究会「ソーシャルワーカーによる地域づくり」  
日時 2018年9月29日  
報告1「グループホーム利用者の地域移行・定着支援」  
社会福祉法人いわみ福祉会サポートセンターふかふか 伊藤 季実子氏  
報告2「つなぎ保育の重要性と取り組み状況」  
松江赤十字乳児院 井上 友見氏  
(佐藤桃子、杉崎千洋)

## 執筆者一覧

齊藤 弥生 (大阪大学大学院人間科学研究科)  
加川 充浩 (島根大学人間科学部福祉社会教室)  
樫山 季実子 (社会福祉法人いわみ福祉会サポートセンターふかふか)  
井上 友見 (松江赤十字乳児院)  
三上 貴大 (松江市社会福祉協議会)  
杉崎 千洋 (島根大学人間科学部福祉社会教室)  
諸岡 了介 (島根大学教育学部共生社会教育講座)  
山崎 亮 (島根大学人間科学部福祉社会教室)

島根大学 社会福祉論集 第7号

ISSN 1881—9419

2020年3月31日 発行

編集人 島根大学人間科学部福祉社会教室

発行人 島根大学人間科学部福祉社会教室

〒690-8504 松江市西川津町1060

印刷所 株式会社 報光社

# Journal of Social Welfare Studies

Shimane University

VOL. 7 MARCH 2020

---

## CONTENTS

### Keynote Speech

Community Welfare Governance based on Community Center District  
(Kominkan-ku): What I learned from Matsue and Sweden

*Yayoi SAITO 1*

### Symposium

Supporting the Community

- Practice of Social Workers Promoting Participation and Collaboration -

*Mitsuhiro KAGAWA, Kimiko HAZEYAMA, Tomomi INOUE,  
Takahiro MIKAMI, Chihiro SUGISAKI, Yayoi SAITO 25*

### Original Article

Problems in Managing Regional Data

on ALS Patients and their Environments

*Ryosuke MOROOKA 57*

How has the Brain Death been talked about in Japan?

*Makoto YAMAZAKI 69*

---

Study on Welfare Society, Faculty of Human Sciences,  
Shimane University (Matsue, JAPAN)